感　　想

長谷見　一　雄

これは僕がワルシャワにいた時の話だから，今から三年ほど前のことである。ある映画会社の某映画監督がさるお役所の費用で世界各地の研修旅行の途中，わが「セイレーンの都」にぶらりとやってきたことがあった……　ところで，このポーランドの首都の美称で，市の紋章にも登場する海の精は，この国では古代ギリシアのぶっそうな仲間とは違って，半人半魚，美しい人魚の姿をしたうえに，手には一振りの剣を握って外敵から市民を守護する，たいそう頼もしい妖精なのである……
というようなことに近い話をその時も映画監督としているうちに，ひょんなことから話題がお互いの出身校のことに及んだ。東大文学部露文科（正式の名称はもっと長ったらしいのだが，この方が早い）と僕が自分のことを言うと，同じ学部を二十年前に出ている映画監督は，そんな学科が自分の出た学校にあることを認めようとしなかった。

今年で創立十年目を迎える東大文学部露文科は，これまでに42人の卒業生を送り出している。十年でこのペースであるから，映画監督が知らなかったのも無理はないが，しかしそれほどバカにした数でもないだろう。次の十年後には卒業生はどのくらいふえていることだろう。その中には詩人や小説家や漫画家にまじって，まだ日本映画が続いているとしての話であるが，一人くらい映画監督になる人も出てくるかもしれない。